

# 『からゆきさんと経済進出―世界経済のなかのシンガポール・日本関係史』を刊行して

愛知淑徳大学 清水洋  
東京経済大学 平川均

本年四月、私たちは『からゆきさんと経済進出―世界経済のなかのシンガポール・日本関係史』を東京の出版社コモンズから出版しました。

明治以降の日本とシンガポール、さらには東南アジアとの経済関係は、「からゆきさん」と呼ばれる日本人女性のシンガポールへの渡航から始まると一般的にいわれていることは御存知のこととおもいますが、それを経済の視点から真正面に扱った研究はほとんど無いように思います。今回の私たちの本は、このテーマを含め、明治以降シンガポールの独立までの期間について日本のシンガポールへの経済進出の実態を明らかにしようとするものです。この研究を通じて私たちは、幾つかの通説が誤っていることを知りました。タイトルに似合わず硬い経済史の本なのですが、現在の両国の経済関係をダブらせてみるなら、興味深い類似

点や対照点が浮かび上がって来るように思えます。

ところで、私たちは昨年（一九九七）九月にシンガポール日本人会を訪問させて頂きました。事務局長の杉野一夫さん、史蹟部の白石晶子さん、石井弥栄子さんたちが私たちを暖かく迎えて下さったのですが、その折に史蹟部の皆さんが戦前の日本人社会の写真集を刊行するための最終作業に入っていることを知り、一気に盛り上がりました。その写真集はご承知のように六月に刊行されています。日本人会の方々が手がけた写真集は、私たちの研究と時期的にもダブるところがあつて四月刊行の私たちの本とあたかも二点セットのような気がしています。手前味噌かもしれませんが、この二冊の書物は日本のシンガポール研究を飛躍的に高めたと思つています。

そこで、私たちの本を簡単に紹介させて

頂きます。研究の目的は歴史的に日本のシンガポールとの関係を経済の観点から解明することでしたが、対象とする時期は、一八七〇年代から日本の占領期を含んで一九六五年のマレーシアからの分離・独立までの一世紀弱の期間です。具体的には、性風俗産業、貿易・商業、漁業、金融業、製造業などの各産業の日本品や日本人の活動を追いました。

ここで性風俗産業を経済学で扱うというのはどういふことだろう？と思う人がいるかも知れません。確かに性風俗産業は経済学の対象でなく、普通は社会学などの対象と思われています。しかし、実際にからゆきさんは日本の経済進出において重要な役割を果たしました。それで、私たちは経済学の観点から、からゆきさんを正面に据えて検討しましたが、そのことによつて、それ以外にも経済進出の経路のあることがはっきりし

ました。

明治の時代になって日本が開国すると華僑の商人（華商）、特に神戸に居を構えた彼らがシンガポールへ日本品を輸出していたのです。それで、私たちは前者を「からゆきさん先導型」進出、後者を「華商媒介型」進出と呼ぶことにしました。初期におけるシンガポールへの日本の経済進出では、このふたつの形態がみられたこととなりますが、以上のように規定したことによって、東南アジアの他の地域への日本の進出では、真珠貝の採取を行うような潜水夫の進出もありましたので、それは「潜水夫先導型」進出と呼ぶことにしました。

私たちは、日本がシンガポールを占領し「昭南島」と呼んだ時期についても、その経済と日本との関係を調べてみました。昭南時代は僅かに三年半に過ぎませんし、占領政策が赤裸々になされた時期です。そのためこの時期についてのシンガポールの研究は、従来、軍事的関心やそれへの批判的研究が中心でした。シンガポールの経済発展を歴史的に分析した著明な本でも、昭南の時代は完全に抜かれているか僅かに触れられているのみです。それは当然でもあるのですが、それを日本企業の経済活動の視点からみたらどのように見えるのかを検討しました。そうしましたら、この時期には多くの大企業が進出して活動を行っていました。さらに、その活動には

殖産興業的な側面があり、戦後のシンガポールの経済に連続する面もあるかもしれない、という仮設も浮かんできました。

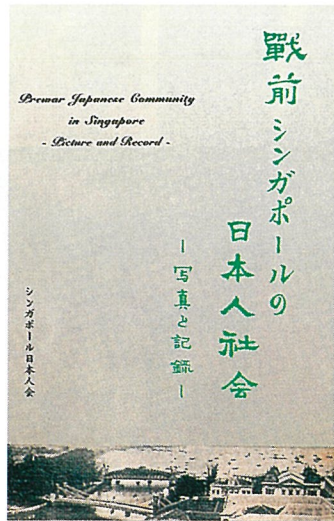
戦後の日本のシンガポールへの再進出についても調べを進めた結果、ほとんど無視されている事実が次々と発見されました。普通、シンガポールを含んだ東南アジアへの回帰は戦後の賠償問題から始まると言われていて、一九五〇年代前半までの時期は「空白期」とされていますが、意外にもこの時期までに日本の企業は銀行、商社、海運会社などがほぼ勢揃いして進出していることが分かりました。考えてみると、シンガポールの当時の宗主国であるイギリスは、一九五一年のサンフランシスコ講和条約の会議において、シンガポール、マラヤ、香港の賠償請求権を放棄しているのです。シンガポールには一九六〇年代に入って血債問題が発生するまで賠償問題はなかった訳ですから、シンガポールへの日本の進出は通説では解けない訳です。それにもかかわらずシンガポールは中継貿易港でしたから、東南アジア、インド、その外ヨーロッパなどとも深い関係にあつて単に例外としては捉えられないのです。それ故、東南アジアへの戦後の回帰について一層慎重な研究が必要であることが分かってきました。

その外、一九五〇年代後半にシンガポール政府のもとに組織された現地政府が、こ

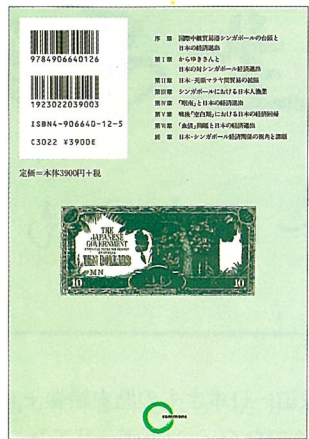
の時期に既に日本企業の進出を日本に要請している事実が分かって驚きました。リー・クアンユー首相は一九五九年に選挙で勝利して政権に就きましたが、この年にも日本政府に工業化のための日本企業の進出を要請しています。一九六二年からシンガポールでは、血債問題と呼ばれる反日運動が展開されたことはよく知られていますが、不思議なことにはこの時期に日本企業の進出ブームさえ起っています。それは何故なのかも検討しました。

日本企業の海外進出は、一九六〇年代末から七〇年代はじめにかけて始まり、その後、本格化してきたと一般に理解されていると思いますが、それ以前の事実は陰に隠れてしまっているように思います。しかし、日本とシンガポールの経済的関係は私たちが普通に考えている以上に早くから構築されました。その骨格について、今回の研究を通じて明らかにすることができたように思います。

ついですが、私たち二人の関係についても触れさせて頂きます。清水は一九八四年からシンガポール国立大学（NUS）にレクチャラーとして赴任しましたが、翌年九月から半年間、平川がたまたまNUSに隣接する東南アジア研究所（SEAS）に客員研究員として留学しましたので、NUSの研究会で会う機会があったのです。清水はN



からゆきさんと経済進出  
世界経済のなかのシンガポールの日本関係史  
清水洋・平川均  
日本経済史  
平川均◎  
コモンズ



USの授業との関係でからゆきさんに興味を持っており、平川は新興工業国 (NICs) の一国として注目される現在のシンガポールの発展を調べていました。ところが、このシンガポールと日本の経済関係は時期を超えてほとんど研究されていないことが分かったのです。そこで、清水が日本に戻りますと共同研究の話がまとまったのでした。

しかし、二人の研究領域は清水がいわゆる経済史、平川がアジア経済あるいは国際経済です。それでも私たちがシンガポールで会わなかったら、二人とも知らなかったように思います。少なくとも共同研究は成り立たなかったでしょう。史蹟部の皆さんもシンガポールに来て知り会われ、歴史的に消えていきそうな写真の存在を知ってそれを残すために写真集を刊行されたと思います。私たちのこの本もほとんど同じ経緯と問題意識を通じて生まれたのです。

シンガポールは、小さな国ですが、日本との関係を見る時、国際経済社会における立地上の特質、そしてそれを最大限に利用しようとする政府の政策もあって日本にとって非常に大きな役割を引受けてきたように思います。それは、現在と同様に過去でもそうです。にもかかわらず、この役割は現在においてもあまり気付かれていないような印象を受けます。今後も皆様の助力

をも得ながら、独立後のシンガポールと日本の経済関係について研究を深めていくつもりです。どうか宜しくお願い申し上げます。

清水洋・平川均共著『からゆきさんと経済進出——世界経済のなかのシンガポール——日本経済関係史』コモンズ、三三三頁、定価三千九百円。なお、本書は一九九九年に英語版でも以下のタイトルで発表される予定です。

Japan and Singapore in the World Economy: Japan's Economic Advance into Singapore, 1870 - 1965, London: Routledge.

